

シュタイナー学園 2020 年度学校評価

卒業式、入学式等、大きな家族のように、数百名の生徒、保護者、教員、卒業生と集まっていた活動はまだ行えませんでした。芸術活動、実体験がこの教育の大きな特色であるにも拘わらず、コロナ禍で実施困難な足かせがある状況においては、人とのかかわりの中で行う教育の大切さを、教育の現場で働く我々教職員同様、各ご家庭でも同様に実感していることと思います。それでも、学園では、児童・生徒の自然な笑顔が変わらずあるように様々な努力をしてきました。不得手であったオンラインの取り組み（高等部）、初めて行う児童との電話でのコミュニケーションなどの出来る範囲でのことを工夫し、手探りで行ってきました。難しい状況の中も皆さんが支え見守ってくださっていたことを感謝します。少しずつ出口が見えてきましたが、教育目標と等しく、どんな時代でも生きる力を培う機会と前向きにとらえて日々活動に取り組んでまいりますので、引き続き、ご支援、ご協力をお願いいたします。

<教育目標>

■12年間一貫教育を行い、児童生徒が安心して学べる大きな家族のような学校

（1）12年間を通して深い人間愛を培う。

- ・全教員が全児童・生徒の顔と名前、及び学校での様子を認知して日々接し、一人一人の個性を尊重し伸ばす。
- ・12年間の各エポック科目、専科授業を通して自然で温かさを伴う道德教育・性教育の在り方を意識し、教育する。
- ・12年間の一貫教育を更に筋の通った骨太のものにするために、教員が互いに学年・校種を超えた繋がりを強くし、互いの教育内容を熟知する。

（2）もっと美しく、もっと感動的な教育芸術を！

- ・シュタイナー教育においては、詩・歌・楽器演奏・絵を描く等の芸術を多用するが、それらを含めて授業が有機的なものとなり、子どもたちに学びの働きかけができているかどうかを教師たちが互いに研究しあい、切磋琢磨し合う。

（3）日本の伝統文化・アジアの感性に根付いた学びを通して、世界へ向かう。

- ・日本におけるシュタイナー教育を鑑み、アジアや日本の伝統文化を意識的に体験する教育を目指し、それらも土台の一つとして自己啓発していける人間を育てる。

■自ら考え、自ら感じ、自らの意志で行動できる人、どんな時代でも自分らしく歩んでいける「生きる力」を持った人を育てる

（1）初中等部で育まれてきた感性を信頼し、感情に流されない思考力を持ち、自らの考えを自らの意志で実現できる人を育てる。

（2）現在・過去・未来の社会に興味関心を持ち、自律して学び続ける力を育てる。

（3）教職員、保護者、地域の方々が調和的・協力的に活動できる場を作る。

（4）生徒の多様性を尊重し、一人一人の個性を生かすために、教師は教育芸術の実践を目指す。

<コロナ禍の教育基本方針>

1) 教育に関して

「子どもたちが明るく健康でいられるための非常時におけるシュタイナー教育の推進」:

この緊急事態宣言の中、教師会は「非常時にできる範囲のシュタイナー教育の学び」を推進する。

「非常時にできる範囲のシュタイナー教育の学び」とは、一般的な知識獲得学習を指すのではなく、

- ・リズムある生活と芸術的要素を考慮した児童・生徒の肉体・精神的健康の安定に配慮する。
- ・学びの意欲と好奇心を満たす。
- ・受け身ではなく、自分ができる家庭・地域・社会への貢献を考え行動するのを助ける。
- ・高等部は遠隔による授業実施とそれに伴う心と健康のバランスをケアしていく。

2) 児童・生徒に関して

「こどもたちが孤立・不安を感じることはない工夫」:

児童・生徒が登校できないために生じがちな孤立・不安を感じることはないように工夫し、担任・学校への信頼を失わず、クラスとの繋がりを感じられるようにする。

3) 保護者に関して

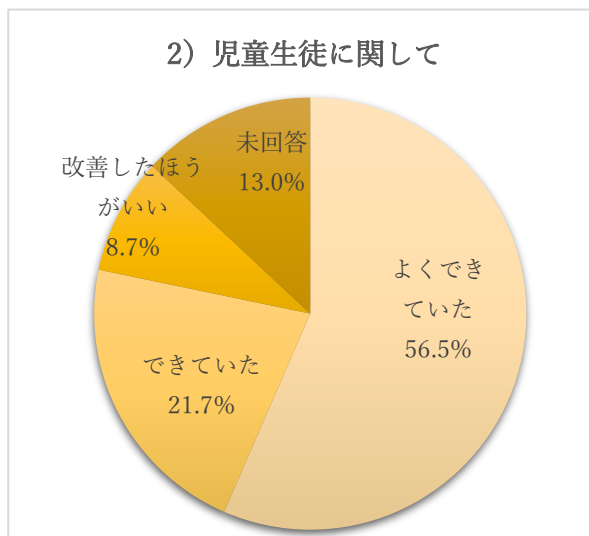
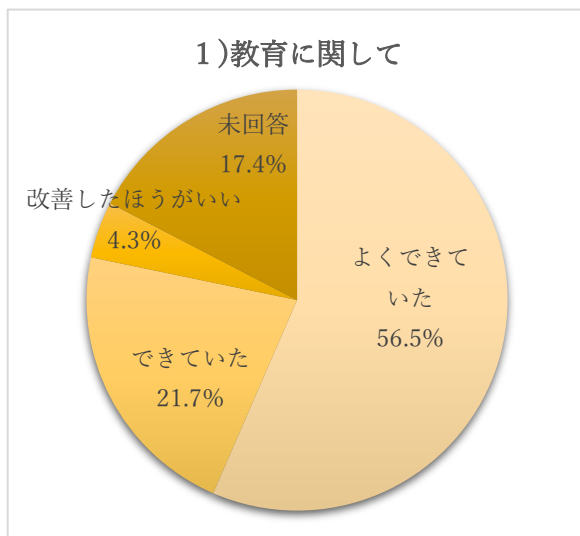
「保護者との精神的な繋がりを失わないようにする」:

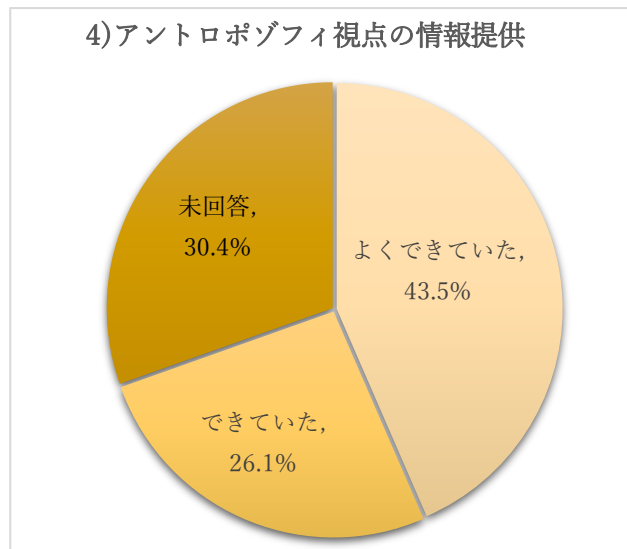
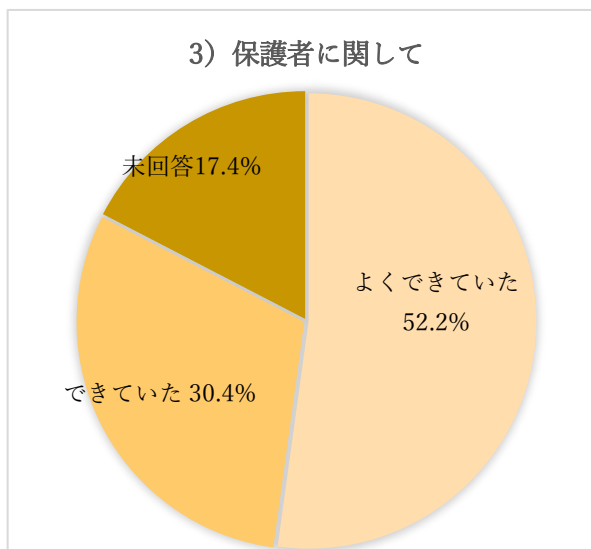
通常の学校交流ができない現在、教師・保護者相互間において丁寧で密な連絡を取り、保護者が学校に対し精神的疎遠を感じないように心掛ける。

4) アントロポソフィ（人智学的）視点によるポジティブな状況対応の情報提供

シュタイナー教育はどのような厳しい環境・状況の中においても、理想を持ちつつ自分の持てる知恵と力で社会への有効的な働きかけができる人間を育てようとしている。私たちはアントロポソフィ（人智学）に基づいたものの見方や考え方を発信し（強制や押し付けを意味しない）、必要以上に不安を持ったりネガティブな方向に傾かないようにしつつ、相互扶助の声掛けをする。

<学校評価結果>





1) 教育に関して

①よくできていた

- ・初めてのコロナ禍という状況に緊張感はあったものの、子どもにとって何が大事かを忘れることなく、最善を尽くそうとみな努力していた。
- ・高等部のオンライン授業も、状況に応じた学びの提供として良かった。
- ・保護者としてはやれる限りのことをやってくださっていたと感じた。
- ・ コロナ禍の中でできることを工夫し、子供たちにも保護者にも学校とのつながりを絶やさぬ実践ができていた。
- ・ 6年奈良歴史旅行について、各公立学校が行き先を変更するなど対応している中で、マスクと手洗い以外は特に対策の説明がない。教育的にその方が良いと判断されたのだろうが、保護者向けにももう少し検討のプロセスなど説明があっても良かったのではないかな。

2) 児童・生徒に関して

- ・ 休校が続いたり、マスクや消毒など通常とは異なる課題にも柔軟に対応し、学ぶ意欲がおちることなくいきいき取り組んでいた。
- ・ 課題を自宅に届けたり電話で話をすることでつながりを保てていた。
- ・ 行事をすべて中止するのではなく、安全に配慮して高等部の体育祭を実施したり、校舎間の移動をなくして行事を実施できたこと。
- ・ こまめな連絡をさくら連絡網などを通じてして頂きました。オンラインクラス会の試みも初めてでしたが、顔を見ながらの話はオンラインでも有り難かった。

3) 保護者に関して

- ・ 休校中の家庭での子どもへの働きかけ（リズムをくずさない、適度な運動、学習のサポート）を根気強くとりくんでいた。

- ・心配不安を抱えながらも、そして様々な価値観の中、なんとか子どもの学びを支えようとしてくださっていた。
- ・保護者向けに定期的にメールでお知らせがあり、見通しの立たない生活の中で学園とのつながりを感じることができた。
- ・保健チームからのホットラインが設立され、子どもだけではなく保護者も対象とした家庭全体への健康面の配慮が感じられた。

4) アントロポソフィ（人智学的）視点によるポジティブな状況対応の情報提供

- ・状況に応じて最善を尽くしてくださっていることが、日々の連絡から感じられました。
- ・特に、前任の養護の先生を含めた保健チームの呼びかけの在り方が良かった。
- ・ネガティブになることもなく、的確な情報提供をいただいております。先生方の補助も大きかったと感じている。
- ・必要以上に不安を持たないような学校の配慮を感じた。